

静岡県東部における縄文時代草創期後半から早期の石器群

—石器群から見た居住パターンの変化について—

中 村 雄 紀

要旨 静岡県東部地域では、縄文時代草創期後半に竪穴住居が出現し、早期には集落遺跡の存在が一般化する。本稿では当該時期の居住パターンを考察するため、帰属時期が明らかな石器群の事例を集成し、石器分布のパターンの検討を行った。その結果、時期によって次のような変化があることが分かった。草創期後半には住居内部を中心に石器や剥片類が残される傾向がある。早期燃糸文期以降は住居跡内部から出土する石器が激減するのみならず住居跡を伴う集落遺跡での石器製作の痕跡が希薄になり、集落とは別の地点で石器集中が形成される事例が、特に押型文期、条痕文期の遺跡に顕著に認められる。早期終末の打越式以降になると集落遺跡内に多数の石器・剥片類が残され、しばしば住居覆土にも廃棄されたものと考えられる。こうした石器群の残され方の違いは石鏃など狩猟具を中心とした石器製作の場の配置の変化を反映したものであり、狩猟のスケジュールや季節性と対応した居住パターンの変化と密接に関わっていたものと考えられる。

キーワード：縄文時代草創期、早期、石器分布、居住パターン

1 はじめに

静岡県東部地域では、縄文時代草創期後半には明確に竪穴住居遺構のある遺跡が現れ、早期後半には遺跡数の増加が1つのピークを迎えることが知られている。草創期から早期にかけての時期は旧石器時代的な遊動性の高い生活と縄文時代的な定住的生活との転換点に当たる時期として注目されてきた。また、定住性と関連して地域性が顕著に表れるようになる時期であるともされている。この時期の生業や居住パターンの在り方に接近するには石器群が有効な分析対象であることはすでに認知されているところであり、石器群の分析をもとに生業の地域的な差や特性を追求する研究も行われてきた（小葉1983、阿部1989・1992、宮崎2005）。しかし現状はそうした研究が十分に進められているとは言えず、ひいては石器研究に必要な十分な資料の蓄積が進められないという状況を生んでいる。この状況は良好な遺跡の調査事例の蓄積が進められつつある静岡県東部地域も例外ではない。

そこで本稿では、静岡県東部地域における草創期後半から早期の遺跡を対象に、石器群の分析から居住パターンの変化を明らかにすることを試みる。

2 時期区分と年代

縄文時代の石器群においては、一般に時期を限定できる特徴をもった石器はごくわずかであり、土器群との相伴関係から時期を推定する必要がある。本稿では草創期後半から早期にかけての時期を土器型式によって大まかに以下の5期に分けて捉える。

草創期後半：草創期の押圧縄文土器段階から表裏縄文土器段階。

早期前葉：早期燃糸文系土器群で、押型文土器出現より前の時期。井草Ⅰ式並行期から稲荷台式並行期、「駿豆燃糸文系土器群」（池谷1997）の広合段階までを含める。

早期中葉：早期押型文土器、「駿豆燃糸文系土器群」のイラウネ段階以降、子母口式より前の時期までを含める。

早期後葉：子母口式、野島式、鵜ガ島台式、茅山下層式、茅山上層式の条痕文系土器の時期。

早期末葉：上記の条痕文系土器に後続する打越式、神之木台式などと入海・石山・天神山・塩屋式などの東海系条痕文土器との時期。

各時期の年代を、静岡県東部地域の資料の近年の年代測

定例（表1）、及び小林謙一氏（2007）による年代測定の集成などを参考にまとめるとおおよそで次のようになる。草創期と早期との境界は約11,600-11,500年前頃とされており、草創期後半は13,000-11,500cal BP（11,000-9,800BP）、早期前葉は11,500-11,000cal BP（9,800-9,500BP）頃に位置づけられる。続く早期中葉については年代測定のデータが乏しく、後葉に関しても鵜ガ島台式以降にデータが限られるため、年代的位置づけは未だ流動的である。仮に8,000BP頃を境として中葉が11,000-9,000？cal BP（9,800-8,000？BP）、後葉が9,000？-7,500cal BP（8,000？-6,500BP）としておく。最後に早期末葉には7,500-7,000cal BP（6,500-6,000BP）の年代が与えられる。

年代と古環境変動とを対比すると、草創期末の多縄文系土器群はヤンガー・ドリラス期の寒冷期にあたり、早期の開始はその後の温暖期への転換とほぼ一致するとされている（谷口2002）。

また、この時期は海進が進む時期である。この地域では、未較正炭素年代で10,000年前以降海水準が上昇し、6,000年前に頂点を迎え、現在より約3m高くなっていたとされる。但し、伊豆半島の大部分は地形が急峻なため現在と比較して海岸線が大きく前進することはなく、さらに

伊豆半島南部では、沈降により6,000年前の海岸線は現海面下にあったというデータもある（太田他1986）。静岡県東部地域で特に大きく地形が変化したと考えられているのは愛鷹南麓・箱根西麓一帯の海岸線である。この地域の地形発達史は地中ボーリング資料により次のように復元されている（以下の年代値は未較正炭素年代）（松原2006）。完新世に入った当初は愛鷹山塊の麓が海岸線であった。海進により約9,000年前以降に狩野川平野に海水が入り込んで内湾となった。8,000年前頃には愛鷹南麓側に砂州が形成され、7,000-6,000年前には砂州が離水してその後背地が湿地帯となった。狩野川平野の内湾が海から切り離されて陸化し、湿地帯となるのは約5,500年前とされる。先の年代値と対照すると、早期中葉から後葉にかけて海域が拡大して内湾が発達し、後葉から末葉にかけてそれらが埋積して湿地化したということになる。

3 分析の対象とする資料

愛鷹山麓の早期の遺跡には、住居跡のある遺跡と、住居跡はなく集石や炉跡などのみの遺跡とがあることから、前者が定住的な拠点、後者がそこから派生した一時的野営地であった、と捉えられている（設楽2002）。本稿では、石器群の検討を組み合わせることによってこうした遺跡群の

表1 静岡県東部の早期の遺跡の年代

遺 跡	試 料	土 器	測定番号	測定年代 (yrBP)	較正年代 (cal yrBP) (2σ)	備 考
大鹿窪	竪穴状遺構炭化材	押圧縄文	Beta-167428	10,850±40	12,885-12,815	
	竪穴状遺構炭化材	押圧縄文	Beta-170267	10,910±60	12,955-12,815	
丸尾北	土器付着炭化物	表裏縄文	IAAA-80890	10,080±50	11,960-11,881、11,828-11,397	
	土器付着炭化物	表裏縄文	IAAA-80891	10,020±50	11,755-11,306、11,300-11,290	
	土器付着炭化物	表裏縄文	IAAA-80892	10,050±40	11,769-11,329	
	土器付着炭化物	表裏縄文	IAAA-80893	9,990±40	11,701-11,672、11,629-11,266	
	土器付着炭化物	表裏縄文	IAAA-80894	10,090±40	11,959-11,883、11,827-11,403	
	土器付着炭化物	表裏縄文	IAAA-80895	10,030±50	11,756-11,321	
	土器付着炭化物	表裏縄文	IAAA-80896	10,090±40	11,691-11,679、11,622-11,268	
	土器付着炭化物	回転縄文	IAAA-80886	9,970±40	11,615-11,251	早期初頭
丸尾北	土器付着炭化物	回転縄文	IAAA-80887	9,730±50	11,246-11,081、10,932-10,879	早期初頭
	土器付着炭化物	回転縄文	IAAA-80888	9,760±50	11,251-11,101	早期初頭
池田B	集石焼土	不明	Beta-127647	9,590±50	11,155-10,715	付近の出土土器では撚糸文・押型文の時期に位置づけられると考えられる。
	集石焼土	不明	Beta-127648	9,480±50	11,065-10,945、10,845-10,830、10,795-10,670	
下ノ大窪	住居床面木炭	打越式	IAAA-51643	6,630±40	7,580-7,430	
	住居炉覆土木炭	打越式	IAAA-51644	6,420±40	7,430-7,270	
	住居炉覆土木炭	打越式	IAAA-51645	6,410±40	7,430-7,270	
	住居床面木炭	打越式	IAAA-51646	6,480±40	7,470-7,310	
	土器付着炭化物	石山式	IAAA-51650	6,410±40	7,430-7,270	
	土器付着炭化物	打越式	IAAA-51651	6,600±50	7,570-7,430	

形成パターンについてより具体的に考察することを目的とする。検討項目とするのは、石器群の組成、剥片類・石核の出土量と出土・分布状況、及びこれらと遺構との関係である。これらの項目はいずれも遺跡で行われた活動、すなわち遺跡の機能と相関すると考えられる。

そこでまず、構成遺構から遺跡形態を以下のように分類した（註1）。

a型：住居跡があり、時に集石や炉跡、土坑を伴う遺跡

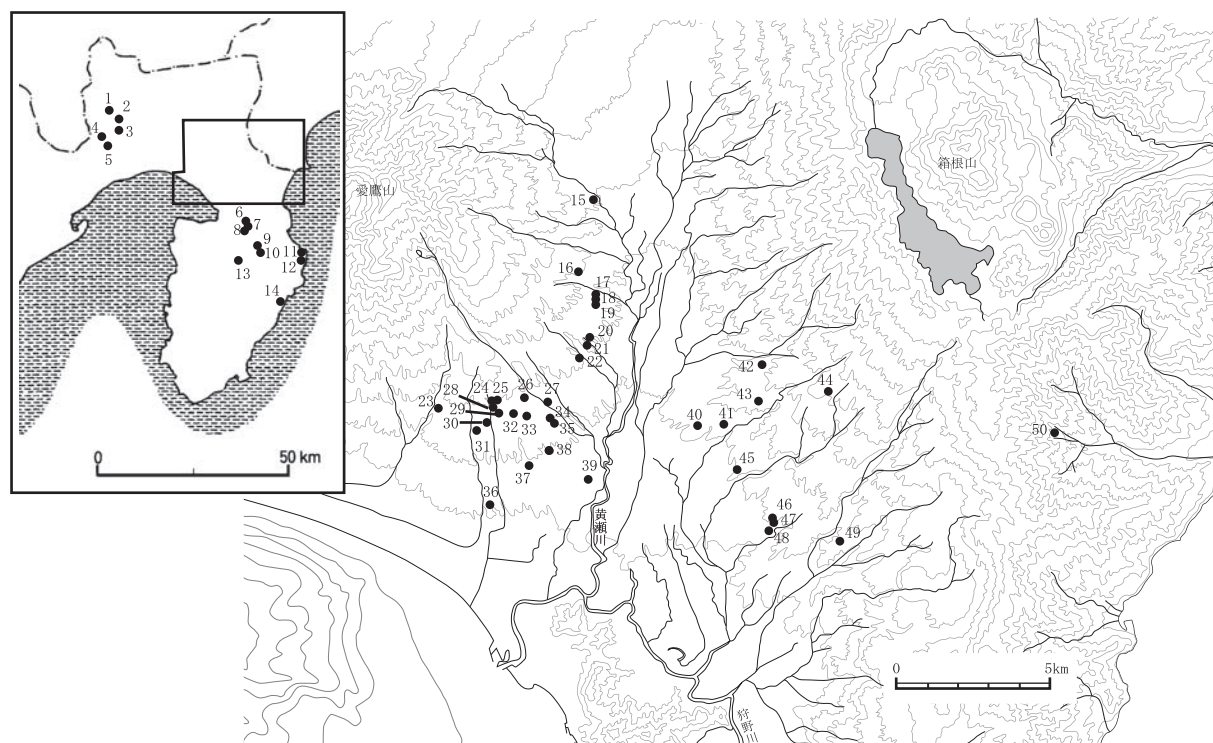
b型：住居跡はなく、集石、炉跡、土坑などの遺構が見つかる遺跡

c型：視覚的に遺構が発見されておらず、遺物の存在のみにより知られている遺跡

石器群については共伴する土器から時期を決定した。但し、多くの遺跡では異なる時期の資料が重複して出土し、特にb型・c型遺跡では包含層出土資料が中心となることから、特定時期の純粋な石器群を抽出することは不可能に近い。したがって、出土している土器が草創期後半から早

期の特定期にほぼ限定される遺跡、或いは土器分布との対比から特定の時期にほぼ限定される資料が分離可能な遺跡を対象をしばって検討を加えることとした。他時期の資料の混在が著しいなどの理由から石器群の時期の検討が不可能な遺跡は検討対象から外した。また、資料の集成は遺跡の調査報告書に拠ったが、遺物の分布や数量に関して十分な情報が得られない事例も検討対象から外した。特に剥片類については、その有無に関してさえ全く情報が得られないことが多いが、具体的な数量が不明でも分布図等から石器集中部の存在が読み取れるものなど、分布状況がある程度把握できるものは検討資料に加えた。

尚、本稿でいう県東部地域とは富士川以東の地域を指す。但し、この地域内では遺跡の調査密度に明らかに疎密があるため、発掘調査資料が最も豊富な愛鷹山麓を中心に扱い、富士山麓や伊豆方面の遺跡はやや付加的な扱いとなることをここで断わっておく。本稿で言及する遺跡の位置は図1に示した。



- 1 大鹿窪 2 若宮 3 黒田向林 4 小塚 5 小松原A 6 菖蒲ヶ池A 7 大平A 8 大平C 9 甲之背 10 六仙山 11 東大室クズレ
12 三の原 13 池の本 14 峠 15 棚返 16 小杉平第2 17 佛ヶ尾 18 下ノ大窪 19 老平 20 内野山V 21 塚松 22 梅ノ木沢
23 元野 24 葛原沢第IV 25 土手上 26 尾上イラウネ北 27 向田A 28 中見代第III 29 広合 30 西洞 31 八兵衛洞
32 尾上第2 33 清水柳北 34 西山 35 桜畑上 36 稲荷林 37 上松沢平 38 丸尾北 39 池田B 40 上ノ池 41 八田原
42 乾草峠 43 中村C 44 元山中C 45 焼場B 46 小平B 47 小平C 48 桧林A 49 上原 50 大越

図1 遺跡の位置

表2 草創期後半の遺跡の石器組成

遺跡名	位置	類型	遺構名	伴出土器	尖頭器	石鏃	筥状石器	搔器	削器	石錐	二次加工剥片	楔形石器	礫器	磨・敲石	石皿・台石	剥片	石核	その他(器種なし等)	その他(器種なし等)
葛原沢第IV	24	a	第1号住居址	押圧縄文	8	12	1		4	1						?	?	他2,439 (礫含む)	
大鹿窪	1	a	1号竪穴状遺構	押圧縄文		11	1	1	5				1	12	2	?	?	他946 (礫含む)	
			2号竪穴状遺構	押圧縄文	2	2			6				3	5	1	?	?	他743 (礫含む)	
			3号竪穴状遺構	押圧縄文	0	3	1							2	2	?	?	他278 (礫含む)	
			4号竪穴状遺構	押圧縄文	1	1		1				1	2	11	1	?	?	他370 (礫含む)	
			5号竪穴状遺構	押圧縄文	1	2			3					4	2	?	?	他488 (礫含む)	
			6号竪穴状遺構	押圧縄文	2	2	2	2						5	2	?	?	他271 (礫含む)	
			7号竪穴状遺構	押圧縄文		13	3	3	1	2				10	1	?	?	他2,314 (礫含む)	
			9号竪穴状遺構	押圧縄文	1									2	3	?	?	他280 (礫含む)	
			11号竪穴状遺構	押圧縄文	1	3		2				2	1		1	?	?	他486 (礫含む)	
			12号竪穴状遺構	押圧縄文		1								1		?	?	他134 (礫含む)	
			14号竪穴状遺構	押圧縄文												?	?	他24 (礫含む)	
			20号石器ブロック	押圧縄文	4	9	1	3			6	13		11		1,303	11		
			草創期2号ブロック	押圧縄文	16	6	1		2			4	1				?	?	
清水柳北東尾根	33	a?																	
丸尾北	38	c	エリアB	表裏縄文	39			2	2	1	9	37		3		440	9		

※「位置」は第1図と対応

4 石器組成

県東部地域の草創期後半から早期の遺跡の石器組成を表2～3に示した。なお、表中には剥片類などを含めた数量がある程度把握できる遺跡を中心に集計しており、十分な情報が得られなかった事例には割愛したものがある。これをもとにまず本節では当該時期の石器群の石器組成について概観する。時期別の主要器種を図2～5に示した。

草創期後半、押圧縄文土器段階の石器群は、大鹿窪遺跡（芝川町教育委員会2006）、葛原沢第IV遺跡（沼津市教育委員会2001）、清水柳北遺跡東尾根（沼津市教育委員会1998b）で良好な資料が得られている（図2）。いずれもa型またはその可能性が高い遺跡である（註2）。厚手の両面加工尖頭器（1・2・14・15）、石鏃（4～8・16～20）が石器組成の中心を占め、これに搔器・削器類（9・11・21）が伴う。筥状石器として報告されている石器

（10）はこの時期に特徴的な器種である。また少数ながら礫器（13）も出土している。なお、大鹿窪遺跡では磨石・敲石（12）、石鏃形の尖頭器（3）な

ど、他の2遺跡では稀な異質な器種が多数見られる。石鏃形の尖頭器は他の尖頭器と同様厚手であるという点で早期に見られるものとはやや異なる。表裏縄文土器段階は、当該期の土器が出土した遺跡数自体は少ないが、石器組成が分かる事例は少ない。この時期のものの可能性が高い丸尾北遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009b）の石器群では、尖頭器、筥状石器はなく、石鏃（22～27）は小型のものが主体である。その他では搔器（28・29）、錐形石器、楔形石器（30・31）などがある。

早期の石器群については、当該地域では早期条痕文系土器期の遺跡における石器組成が石鏃と磨石・敲石類を中心としたものとなることが早くから指摘されていたが（笹津他1976）、その傾向は早期前葉にまで遡る。磨石・敲石類はほとんどの遺跡で安定して存在するようになり、特にa型遺跡では撚糸文土器段階の早い時期にあたる上松沢平遺

表3-1 早期の遺跡の石器組成

遺跡名	類型	位置	遺構名	時期	伴出土器	尖頭器	石鏃	搔器	削器	石匙	石錐	R F	楔形石器	礫器	打製石斧	磨製石斧	磨・敲石	石皿・台石	剥片	石核	その他(器種なし等)	その他(器種なし等)
上松沢平	a	37	1号住居	前葉															?	?	他1	
			2号住居	前葉																		
			3号住居	前葉													3	1				
			4号住居	前葉													1					
			1号竪穴状遺構	前葉															?	?	他2	
			2号竪穴状遺構	前葉															?	?	他2	
			3号竪穴状遺構	前葉															?	?	他2	
			4号竪穴状遺構	前葉																		
			5号竪穴状遺構	前葉																		
			6号竪穴状遺構	前葉															?	?	他1	
			集石・炉跡等	前葉			1	1									5					
			遺構外	前葉主体			53		3	1			8	1	6	2	130	25	?	?	他388	
三の原	a	12	1号住居	前葉	稲荷台式												6					
			2号住居	前葉	稲荷台式																	
			3号住居	前葉										1								
			4号住居	前葉																		石器なし
			遺構外	前～中葉	広合段階～西洞段階		10		6		1	5	3	8	2		223	29	105	3		

※「位置」は第1図と対応

表3-2 早期の遺跡の石器組成

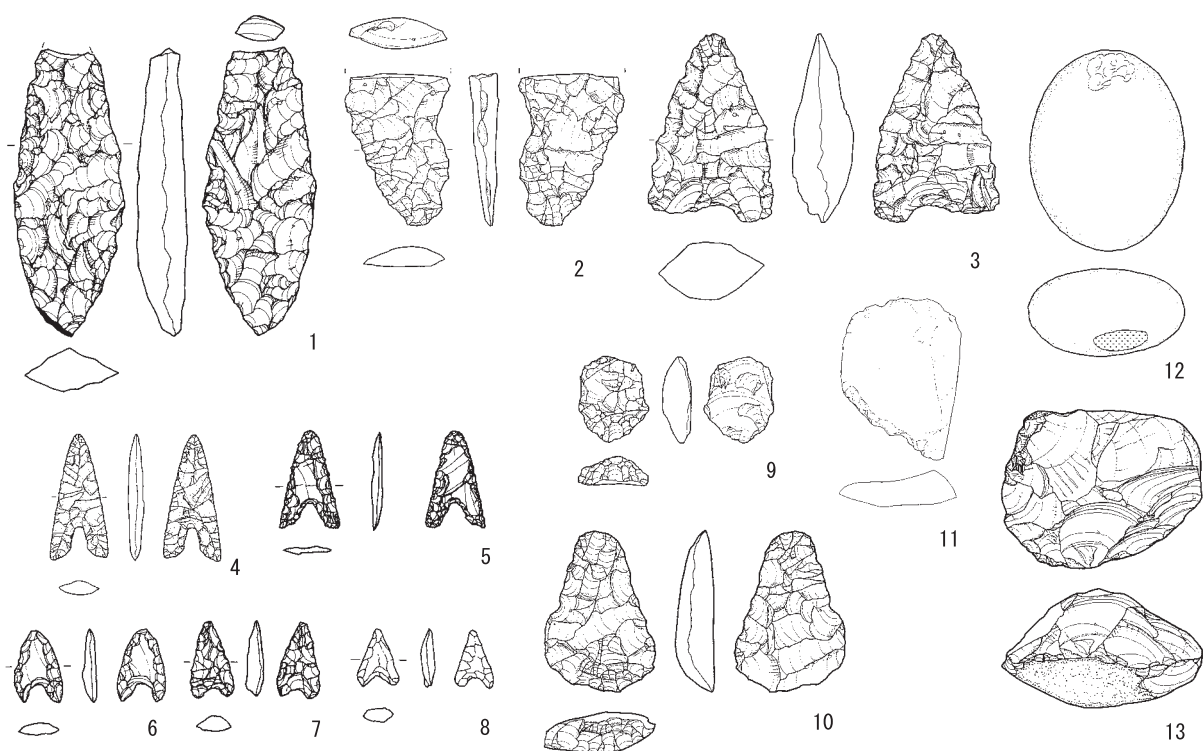
遺跡名	類 型	位 置	遺構名	時期	伴出土器	尖 頭 器	石 鏃	挿 器	削 器	石 匙	石 錐	R F	楔 形 石 器	礫 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 ・ 敲 石	石 皿 ・ 台 石	剥 片	石 核	その他 （ 種 の 記 載 な し 等 ）
大平C	a	8	第2号住居	前葉	稲荷台式												3				
			第4号住居	前葉	稲荷台式												2				
			第5号住居	前葉	稲荷台式																石器なし
小杉平第2	a	16		前葉	稲荷台式									4			19	4	1		
広合b～e区	b	29	富士黒土層	前葉	広合段階		45		10				3	17	9		48	10	?	17	
丸尾北	b	38	調査区東部・漸移層	前葉	回転縄文、燃糸文		24	2				8	12				6		304	8	
稲荷林	b	36		前葉	燃糸文主体		1					1					7		9		
上原	c	49		前葉	燃糸文主体		26							3			5	2	?		
尾上イラウネ北	a	26	1号住居	中葉	押型文		1										5	3			
			2号住居	中葉	押型文												21	1	4		
			3号住居	中葉	押型文		1										1				
			遺構外	中葉	押型文		23		3	1		3	4	24	4	1	78	3	359	13	
尾上イラウネ北 (第2次)	a	26	第1号住居	中葉	押型文												4				
			第3号住居	中葉	押型文												1				
			第2・4号住居	中葉	押型文																石器なし
			土坑等	中葉								1		1			1	1			
六仙山	a	10	遺構外	中葉					3												
			住居址	中葉						1			1				4	80	5	31	1
			2号住居	中葉	押型文													1		37	3
			3号住居	中葉	押型文													1		23	
			4号住居	中葉	押型文													1		1	
			5号住居	中葉	押型文				1								2	1	29	1	
			6号住居	中葉	押型文										1			1	38		
若宮	a	2	10号住居	中葉	押型文				1								1		23		
			11号住居	中葉	押型文		1												17		
			第12号竪穴住居	中葉	押型文												1				
			第19号竪穴住居	中葉	押型文			3													
清水柳北東尾根	a	33	第20号竪穴住居	中葉	押型文												1				
			全区	前～中葉		13	1,908		47	5	6				83	18	328	35	19,465	82	砥石8 石器なし
土手上d・e区	b	25	2号住居	中葉	押型文															1	
			62号住居	中葉	押型文																
向田A	b	27	X=30～40	中葉	押型文		45	1	5				7	5	1		71	1	約900	26	剥片集中あり
			全区	中葉	押型文		24		2		3	5	15	3	1		46	56	363	9	
小平B	b	46	丘陵部	中葉	押型文		4		1		2	5	9	1	1		12	14	225		
				中葉	押型文		5		1			4		6	3	1	35	1	?		石器集中あり
小平C	b	47		中葉	押型文		15							9			52		?		石器集中あり
池田B	b	39	黒曜石埋納土坑	中葉	押型文		1					1	21						約200		
内野山V	b	20		中～後葉			7	4	8	1		7	1	12	1	1	135	41	363	26	砥石3
元野	b	23		中～後葉主体			26		33	2			3	7		1	32	10	402	25	石鏃3、石製品3
八兵衛洞	c	31		中葉			3							2	3	2	13	2	数点		
黒田向林	c	3		中葉主体			164	1	5	4	2				3		80	17	?	17	
小松原A	c	5		中～後葉主体			6								5	3	12		636		黒曜石剥片は11点のみ
峠	c	14	3・10区	中～後葉主体			204		88		27			13		4	73	13	7960		
			C区	中～後葉主体			393		366	2	54			24		3	811	153	14,888		他12
焼場B	c	45	G-23グリッド	中～後葉主体	押型文/野島～鶴ガ島台?		2						1				10	4	約500		
尾上第2	a	32	1号住居	後葉	野島、清水柳E類		1					3					1	1	?		他6
			2号住居	後葉	野島、清水柳E類		5					10					2	2	?		他6
			3号住居	後葉	野島、清水柳E類		1					1					1		?	1	他10
			4号住居	後葉	野島、清水柳E類、茅山下層			1											?		他5
			5号住居	後葉	野島、清水柳E類、茅山下層		1	1									5	1	?		他25
			6号住居	後葉	野島、清水柳E類							3							?		他4
			7号住居	後葉	野島、清水柳E類、茅山下層									1			9	1	?		他40
			8号住居	後葉	茅山下層														?		なし
			9号住居	後葉	清水柳E類、茅山下層														?		他4
			10号住居	後葉	野島、清水柳E類												3	2	?		他4
			11号住居	後葉	野島、清水柳E類							2					3		?		他18
			土坑等	後葉								1					3		?	1	他26
			遺構外	後葉			12	1	1	1		31					34		?	14	
清水柳北東尾根	a	33	1号住居	後葉	鶴ガ島台										1		1				
			79号住居	後葉	鶴ガ島台															4	
			19号住居	後葉	茅山下層		1														
			30号住居	後葉	茅山下層															1	
			47号住居	後葉	茅山下層		1										1			5	
			49号住居	後葉	茅山下層															3	
			21号住居	後葉	茅山下層															1	
			24号住居	後葉	茅山下層															9	23・25号住居と重複
			25号住居	後葉	茅山下層		2													13	
			42号住居	後葉	茅山下層											1	1				
			26・35・43号住居	後葉	茅山下層																石器なし
			39・50号住居	後葉	茅山上層																石器なし
梅ノ木沢	a	22	56号住居	後葉	茅山上層															1	
			2号住居	後葉	野島		2										4				
			3号住居	後葉	清水柳E類		1														
			4号住居	後葉	茅山上層		2														
			集石・土坑	後葉													4				
六仙山	a	10	遺構外（集落部分）	後葉			19		1						2		39	1	77		
			9号住居	後葉																	
			8号住居	後葉?													2	1			石器なし
土手上b・c区	b	25		後葉	条痕文主体		41		18	3	2	○	1	2			26	9	579		剥片はZN以上を集計
西山	b	34	1区	後～末葉	ハツ崎・打越式?		5		1			1	1	9			84	240			

※「位置」は第1図と対応

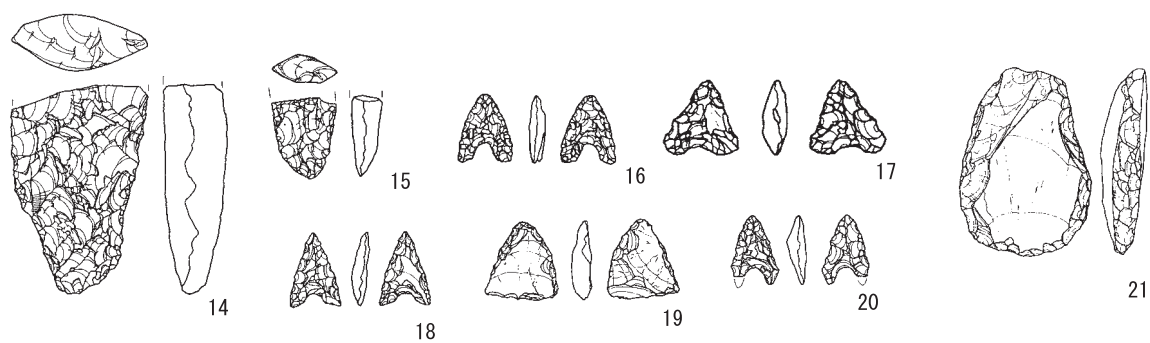
表3-3 早期の遺跡の石器組成

遺跡名	類型	位置	遺構名	時期	伴出土器	尖頭器	石鏃	挿器	削器	石匙	石錐	R F	楔形石器	礫器	打製石斧	磨製石斧	磨・敲石	石皿・台石	剥片	石核	その他（種の記載なし等）
大越	b	50		後葉主体	子母口式並行・鵜ガ島台式・野島式	90			3	2				14	4	>100	>3	?	?		
桧林A	c	48	B・7グリッド付近	後葉	条痕文系		4								1		1				
棚返	b	15	集中部3	後～末葉	無文・鵜ガ島台式	1	12	4					3		1	約50	約20	585	8		
西洞c・d区	b	30	第1号石器製作址	後葉	鵜ガ島台式		79	10					5		3		8		数千	19	
			全区	中～後葉主体			256	31	7				26	12	54	2	129	25	数千	61	
上ノ池	b	40	黒曜石集中地点	後葉？	条痕文		33												約650		
				中～後葉主体	押型文／子母口～野島式	35		3		1	19			1	1	1	41	9	1,284	14	原石1、他20
元山中C	b	44		後葉	野島式		5									1	?		80		
中村C	c	43	第1号石鏃製作址	後葉	無文		7					32							480		
老平	c	19	E6グリッド	後葉主体			4					2					5	1	850	2	
	b		EFG13-16グリッド	後葉主体		1	45		3			11	4	2			45	6	2,256	29	
下ノ大窪	a	18	2号住居	末葉	打越式主体		7					1	1				21	8	363	3	原石1
			3号住居	末葉	打越式、入海Ⅱ式、石山式	1														53	
			4号住居	末葉	なし																石器なし
			6号住居	末葉	入海Ⅱ式主体												3	1	11		
			8号住居	末葉	打越式													4	1	32	
			10号住居	末葉	入海Ⅰ・Ⅱ式、石山式														1	29	1
			12号住居	末葉	東海条痕文系													4		13	
			14号住居	末葉	打越式、入海Ⅰ・Ⅱ式、石山式	3		1									12	8	166	1	原石2
			15号住居	末葉	打越式、石山式								1				2	2	14		
			18号住居	末葉	早期末													1		1	
			19号住居	末葉	打越式、石山式			1										1	1	60	
			2号竪穴状遺構	末葉														1	2	17	
			3号竪穴状遺構	末葉														10	2	5	
			4号竪穴状遺構	末葉			2											4	1	14	
			5号竪穴状遺構	末葉														4	1	14	
			6号竪穴状遺構	末葉			1											2	6	9	
			遺構外	末葉			69	2	14	5	2	14	30	8	4		413	151	3,186	14	原石1
佛ヶ尾	a	17	1号住居	末葉	打越式主体		6						4	1			1		229		両面調整1
			2号住居	末葉	打越式主体		2										2		102	1	
			3号住居	末葉	打越式主体													4		44	
			4号住居	末葉	打越式主体	1	4		1				1				1		92	2	
			5号住居	末葉	打越式主体												4		56		
			6号住居	末葉	打越式主体		2				1	2					1	1	93	1	
			1号竪穴状遺構	末葉	打越式主体		5			1		1	2				6		249	1	
			2号竪穴状遺構	末葉	打越式主体		3		1			2					1		156	1	
			3号竪穴状遺構	末葉	打越式主体		1						1						26		
			土坑・集石	末葉	打越式主体		1		4				1				5	1	64		
			遺構外	末葉	打越式主体		119	1	20		2	56	69	15	6		200	53	4,597	46	両面調整1
			3号住居周辺	末葉	入海式														2	16	
塚松	a	21	石器集中	末葉	入海式		7		1	1		1	14			1	8	4	151	2	
乾草峠	a	42	第1号住居	末葉	神之木台式		6					2	3							119	
			第2号住居	末葉	神之木台式		5					3								54	
			第3号住居	末葉	神之木台式		13			1								3		189	3
			第4号住居	末葉	神之木台式		8					3								86	
			第5号住居	末葉	神之木台式		12					1								106	
			第6号住居	末葉	神之木台式		2													14	
			第7号住居	末葉	神之木台式		3											1		72	
			第8号住居	末葉	神之木台式		3					1								15	
			第9号住居	末葉	神之木台式		8					2						1		71	
			第10号住居	末葉	神之木台式		2													23	
			第11号住居	末葉	神之木台式									1						13	
			第12号住居	末葉	神之木台式		2							1				2		21	
			第13号住居	末葉	神之木台式		4			1								3		74	1
			第14号住居	末葉	神之木台式															7	
			土坑等	末葉	神之木台式													5		13	
			遺構外	末葉	神之木台式		197			5	1	4	29	11	2	2	1	76	3	2,164	2
桜畑上遺跡 (第二東名No.1)	a	35	1号住居	末葉	打越式主体							2	1				5	1	112	1	
			2号住居	末葉	下吉井式、塩屋式		2				1	1							160	1	
			3号住居	末葉	早期末葉～前期初頭		2										1		78	1	
			4号住居	末葉	下吉井式、塩屋式													2		3	
			5号住居	末葉	塩屋式												2		19		
			6号住居	末葉	塩屋式、下吉井式														2		
			7号住居	末葉	塩屋式		3				1	3	2				7		857		
			1号竪穴状遺構	末葉			7					4	6	2			9	1	325	3	
			2号竪穴状遺構	末葉																28	
			3号竪穴状遺構	末葉			1														
			4号竪穴状遺構	末葉													2		145		
			石器集中	末葉	打越式、塩屋式、下吉井式		9				1		1	1			6		約470	2	原石1
清水柳北東尾根	a	33	22号住居	末葉	上ノ山～入海Ⅱ式														1		
			23号住居	末葉	上ノ山～入海Ⅱ式															石器なし	
			27号住居	末葉	上ノ山～入海Ⅱ式															石器なし	
			65号住居	末葉	天神山式		2							1	1						
			69号住居	末葉	天神山式													8	3		
															1	2	7				

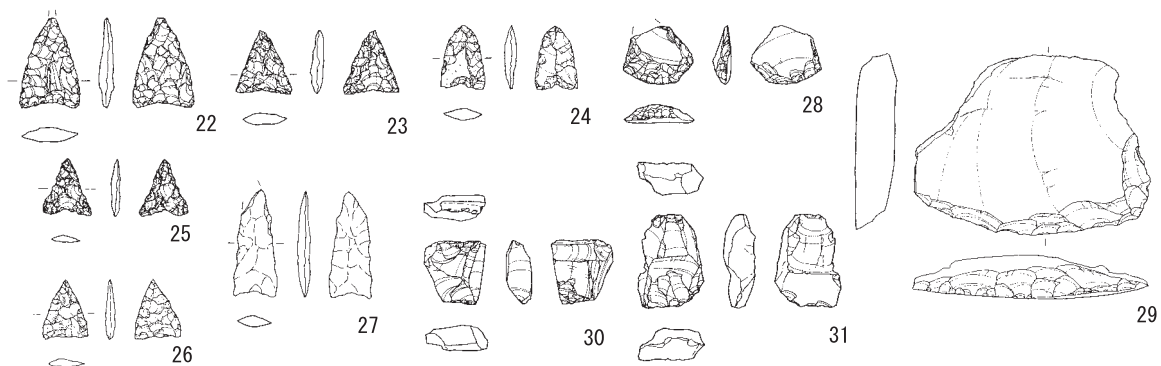
※「位置」は第1図と対応



大鹿窪遺跡



葛原沢第IV遺跡



丸尾北遺跡(エリアB)

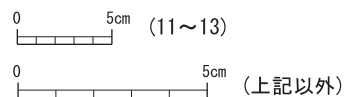
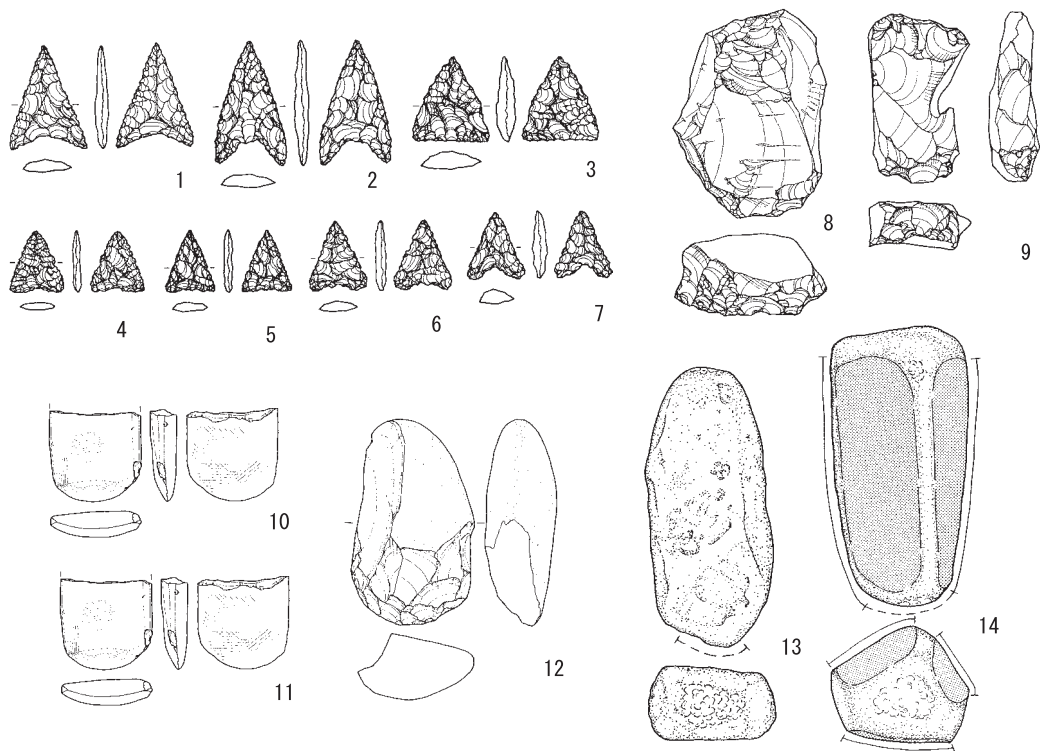
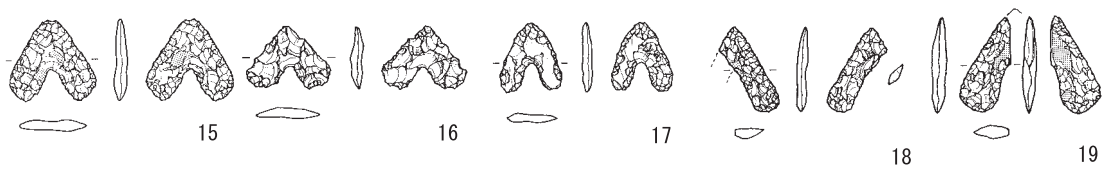


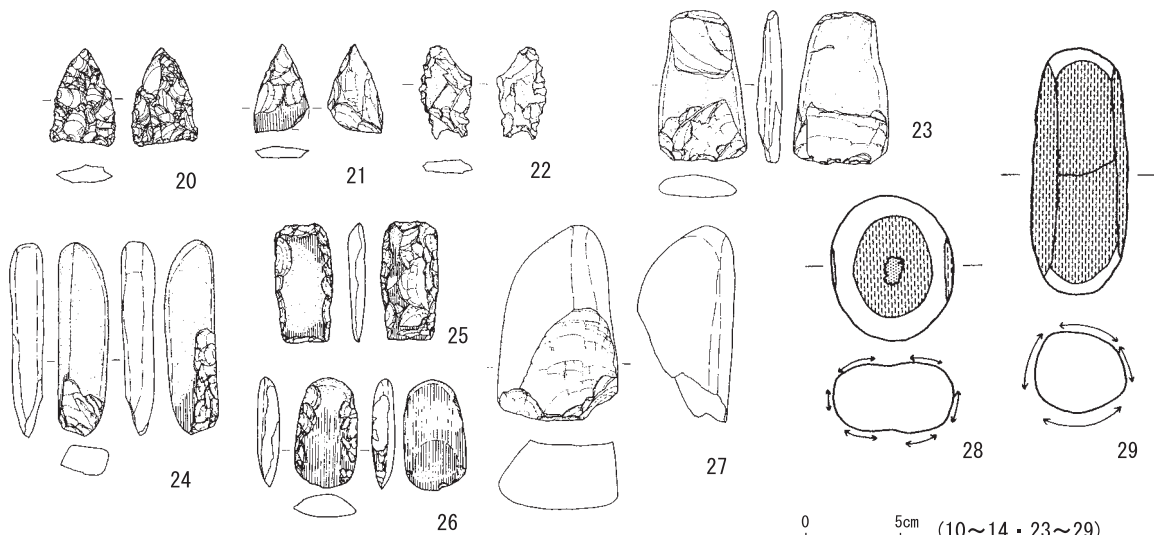
図2 草創期後半の石器群



上松沢平遺跡(早期前葉)



八田原遺跡(早期中葉)



尾上イラウネ北遺跡(早期中葉)

0 5cm (10~14・23~29)
0 5cm (上記以外)

図3 早期前葉・中葉の石器群

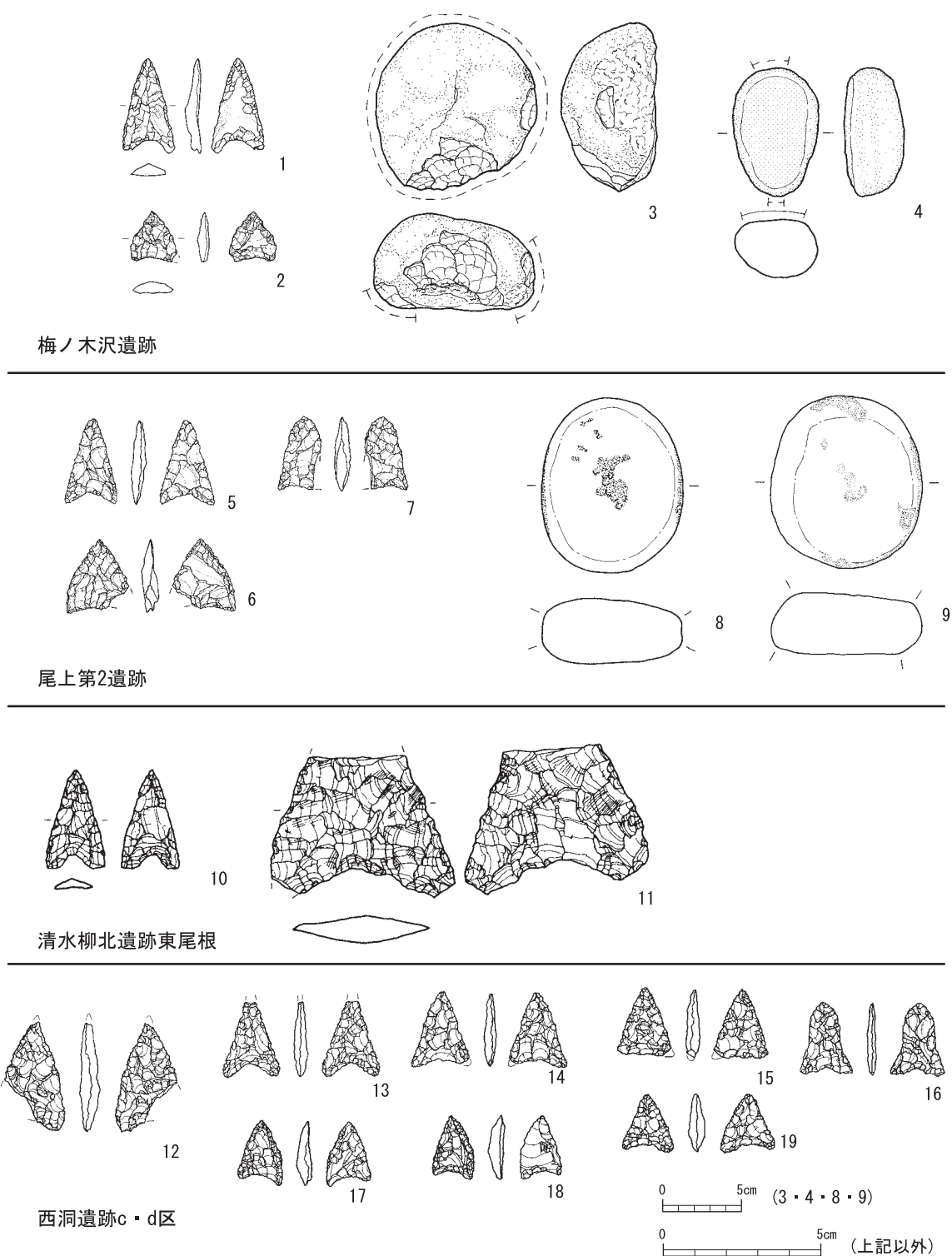


図4 早期後葉の石器群

跡（第3図1～14）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）から稲荷台式期の遺跡まで磨石・敲石類が多数出土する。住居跡に限ってみると、基本的に覆土から出土する石器は少ないが、その中でも磨石・敲石類が多い傾向

がある。その他では礫器・石斧（10～12）の出土が目立つ（註3）。但し磨製石斧は上松沢平遺跡で2点出土しているものの、他のこの時期の遺跡では見られない。

石鏃と磨石・敲石類が石器組成の中心となる傾向は早期

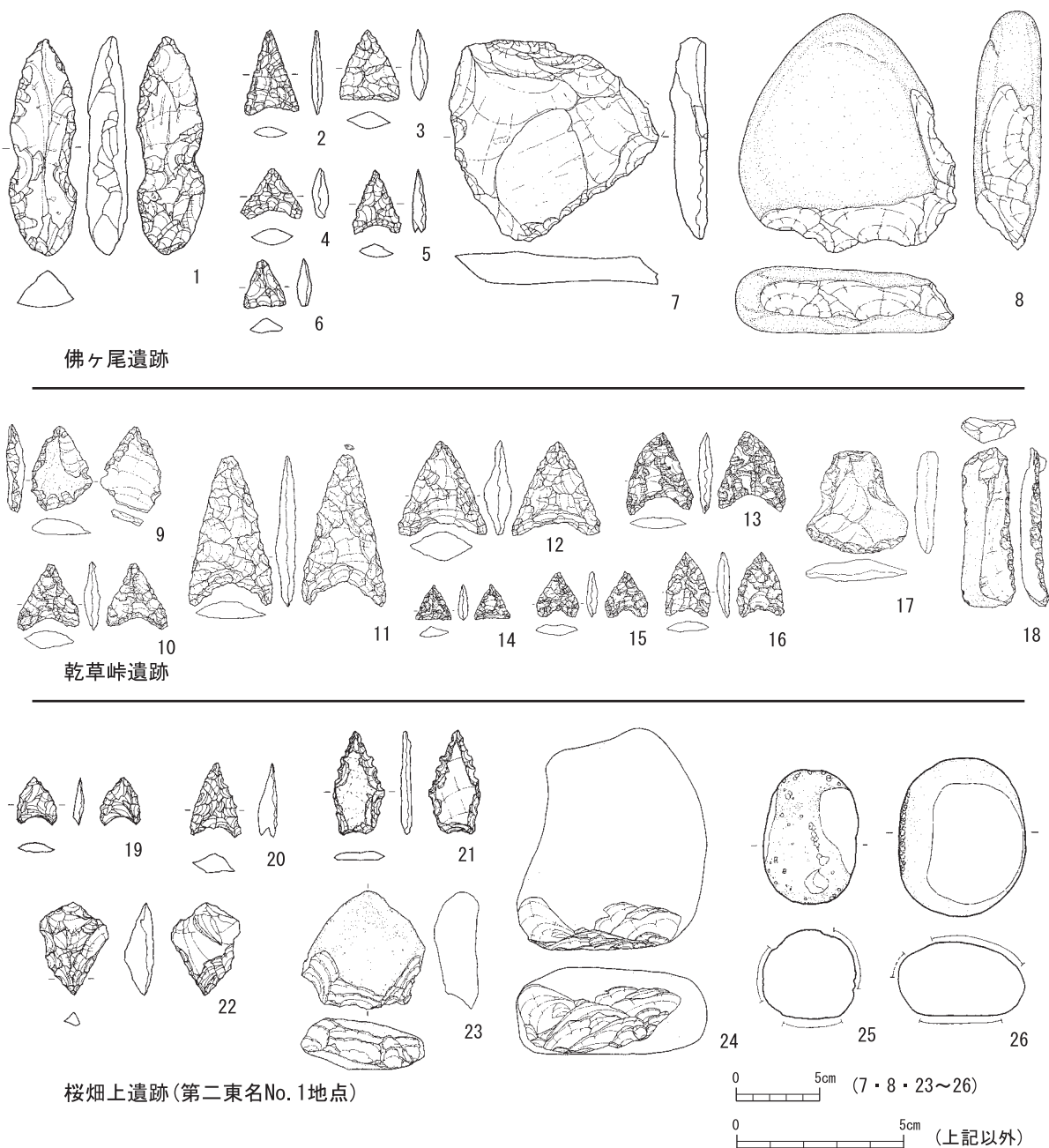


図5 早期末葉の石器群

中葉以降、末葉まで同様に認められ、早期中葉の資料を主体とする富士山麓の若宮遺跡（富士宮市教育委員会1983）、黒田向林遺跡（富士宮市教育委員会1986）、中葉から後葉の資料を主体とする伊豆東海岸の峠遺跡（東伊豆町教育委員会1995）など、石鏃の製作場と考えられる石鏃が大量に出土する遺跡が現れる。中葉に特徴的な石器としては局部磨製石鏃（図3・15・18・19・21）が挙げられる。これは当地域では押型文土器に伴うものと考えられる。礫器・石斧は前葉から継続して存在する。1遺跡あた

りの点数は少ないが主に礫素材の磨製石斧（24～26）が多くの遺跡で見られるようになる。早期後葉（図4）では集落遺跡など確実にこの時期のものと考えられる資料を見る限り、礫器、石斧の出土例が減少する。また、鏃とするには極端に大きい石鏃形の尖頭器（11）の出土例が見られる（註4）。早期末葉の石器群（図5）では、佛ヶ尾遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007a）、下ノ大窪遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）で尖頭器（1）の出土が報告されているが、例数が少なく

希少な存在である。

5 遺跡と石器の分布

前節では主要器種の組成について述べたが、ここではさらに剥片類や石核を検討対象に含め、時期ごとの石器製作の変化について考察する。

(1) 草創期後半

押圧縄文土器段階の大鹿窪遺跡、葛原沢第IV遺跡では住居跡床面に集中する形で多数の石器・剥片類が出土しており（図6）、住居内で石器製作が行われていたことが指摘

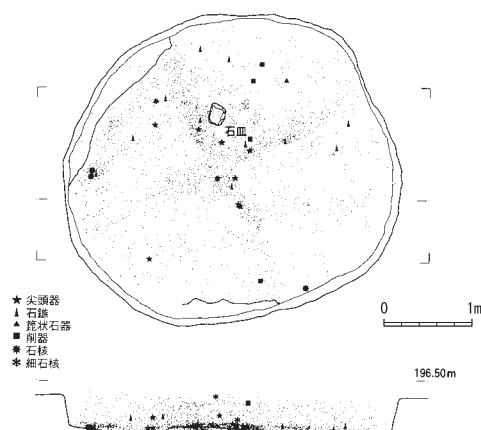


図6 葛原沢第IV遺跡第1号住居址の石器出土状況

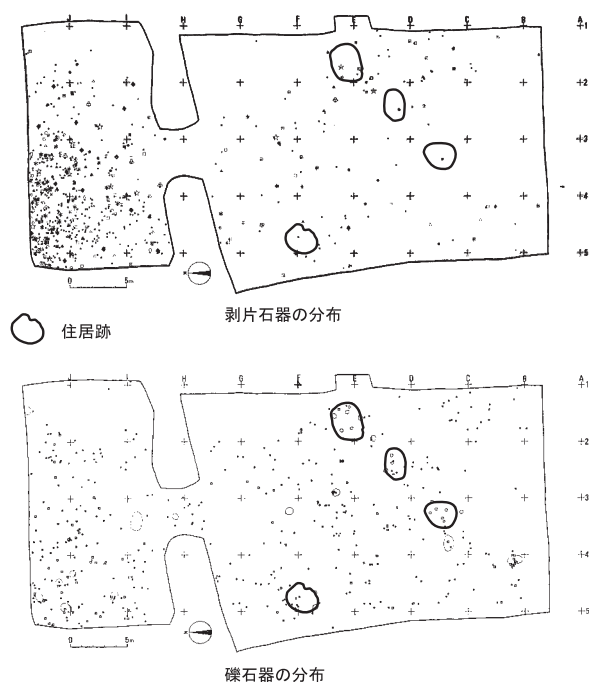


図7 三の原遺跡の住居跡と石器分布

されている（池谷2007）。清水柳北遺跡については、多数の剥片・碎片から成る石器集中が休場層に食い込む形で出土していることから住居跡であった可能性が示唆されており（註2）、同様の状況であった可能性がある。葛原沢第IV遺跡、清水柳北遺跡ではともに住居あるいはそれに相当すると考えられる範囲の外側周辺部にも土器・石器の分布の広がりが確認できる。大鹿窪遺跡に関しては他時期の遺物との混在のため遺構外の草創期の遺物分布は不明確である。

出土石器は黒曜石製のものが多く、葛原沢第IV遺跡では尖頭器製作の最終工程或いはリダクションが行われ、清水柳北遺跡についても、尖頭器の調整剥片が多く出土しているとされる。出土している石核は非黒曜石でほとんどがホルンフェルスであり、形態から礫器の可能性も考えられるものである。主にホルンフェルスで製作された礫器や一部の剥片石器が素材から遺跡内で製作される一方、尖頭器など黒曜石製石器（分析されている限りではいずれの遺跡でも神津島産が主体である）は製品・半製品の状態から作業が行われたことが想定され、住居内でこうした作業により生じた剥片・碎片類が廃棄されたものと考えられる。

表裏縄文土器段階では、まとまった石器群の内容が把握できるのは丸尾北遺跡のみである（註5）。遺構を伴わない石器集中があり、構成石材は信州産黒曜石、次いで柏峠産黒曜石が多い。資料は総じて小形であるが、楔形石器が多く、また小形になった石核も出土している。剥片類の観察結果から、これらは原石ではなく、石核として調整が進んだ段階で遺跡に搬入され、石鏃など小形の剥片石器の素材を供給したと推定される。

(2) 早期前葉～早期中葉

早期・撚糸文土器段階のa型遺跡では、草創期押圧縄文土器期とは対照的に、住居跡の床面上はおろか覆土中からごく少数の石器が出土するのみとなる（池谷 前掲）。草創期の遺跡のように住居内で石器製作が行われなくなったばかりでなく、複数の住居跡が出土している遺跡でも住居跡が石器の廃棄場として利用されていないことから石器製作が住居近傍で行われていなかった可能性が高い。この点に関しては、遺構外の石器の出土状況に関して十分な情報の得られる事例が少ないため限定的にしか論じることができない。井草Ⅱ式～夏島式の集落遺跡である上松沢平遺跡では、住居跡の他、集石、炉跡まで含めても遺構内出土石器は主に磨石・敲石類で、剥片石器はごく少数となって

いる。報文によれば遺構外では主要器種以外の石器が400点以上あり、詳しい分布状況などは不明であるが単純に分布密度を算出すると100㎡当たり10点以下である。三の原遺跡（立教学院三の原遺跡調査団1991）南区は駿豆撚糸文系土器群の広合段階から西洞段階の資料が主体とされる（池谷1997）。4基の住居跡はほぼ同時期のものとされており、出土石器はやはり磨石・敲石類が主となっている。住居跡が分布する調査区の南区全体でも石器組成の主体は磨石・敲石類で、剥片類は散在し特に集中した分布は示さない（図7）。なお、隣接する北区で黒曜石碎片が集中して出土している。これについては石器製作跡の可能性と流れ込みによる集積の可能性とが考えられているが、重複して出土している土器は早期後葉のものであり、層位的にも集落部分とは時期が異なるものと判断されている。小杉平第2遺跡（裾野市教育委員会1982）では、住居跡か否かは定かではない竪穴状遺構（「1号生活址遺構」）が1基出土している。遺構の周辺まで含めて出土石器は礫器や磨石・敲石などに限られ、黒曜石剥片は1点のみしか出土していない。大平C遺跡（大仁町教育委員会1993）、若宮遺跡の他、表から割愛した大平A遺跡、菖蒲ヶ池A遺跡、東大室クズレ遺跡等の事例を見ても住居跡出土石器は多くて磨石・敲石類が数点程度というもののみであり、住居跡内から多数の剥片石器、剥片・碎片類が出土した草創期後半の場合とは状況が大きく異なることが推定される。

a型遺跡については上記のように石器製作の場の痕跡が乏しいと言えるが、b・c型遺跡については剥片類の出土量や出土位置に関する情報が得られる遺跡が少なく、現段階では十分な資料が少ない。その中では、丸尾北遺跡のように小規模な石器集中のある遺跡（註6）と、稲荷林遺跡のように石器の出土量自体が少ない遺跡が見られる。

早期中葉、押型文土器主体の遺跡ではb・c型遺跡で石器集中が残されている例がよりはっきりと認められる。土手上d・e区では押型文土器の分布と重複して径約20mにわたり石器が分布しており、これは石鏃・磨石・敲石や石核、剥片類から成っている。小平B遺跡、小平C遺跡（三島市教育委員会1997）でも、集石遺構の周辺などに石器集中が残されている（図9-④）。また、池田B遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000）では黒曜石を埋納した土坑が1基あり、楔形石器や剥片など、石器素材を納めたものと考えられている（図9-①）。比較的広範囲の

調査事例でも住居跡が周囲で見つかっておらず、石器製作の場が集落遺跡とは別の地点に設けられていたことは確実である。無論こうした石器集中の存在はb・c型遺跡に普遍的なものではなく、八兵衛洞遺跡（沼津市教育委員会1981）など剥片類の出土がほとんど見られない遺跡も存在する。

a型遺跡については、いずれの遺跡でも住居跡覆土からの石器が少ないのは同様である。表中に示した事例の他、この時期の住居跡と見られる遺構は尾上イラウネ遺跡、イラウネ遺跡などで住居と見られる遺構が見ついているが、管見の限り石器が出土している事例でも石鏃や磨石・敲石類などが数点出土する程度であり、住居跡から出土する石器はごく少数である傾向が窺える。一方、遺構外の包含層の分布状況については明示されている例は少ないため限られた事例から推定する他ない。尾上イラウネ北遺跡（沼津市教育委員会2002b）では住居跡と炉跡とがまとまって分布する状況が明らかになっているが、この領域での剥片類の出土量は、住居覆土・住居外ともに疎らである（100㎡当たりでは約10点以下）。一方、これと異なる様相を示すのが若宮遺跡の事例である。この遺跡では石鏃及びその末製品が約1,900点、剥片類が黒曜石約9,000点、頁岩・硬砂岩約10,000点出土しており、集約的な石器製作遺跡の様相を呈している。但し、土器と石鏃以外の分布は不明のため遺構と石器群の関係を詳細に掴むことはできない。住居跡や炉跡などには少なくとも早期前～中葉にわたる異なる時期のものが含まれるが、遺跡の資料の大半は中期中葉の資料で占められるようである。石鏃・同末製品は調査地の広い範囲から出土しているが、集中的な分布箇所は調査地中央部の谷部分など、押型文土器を伴う3基の住居の分布とは一致しない。住居跡からは少数の石器しか出土しない一方で、押型文期と見られる炉跡周辺に石鏃や剥片類が多く分布するとされている。これだけの情報から断定することはできないが、集落と石器製作の場の中心とは必ずしも一致していない傾向が窺えることから、主たる石器製作場を伴うb型遺跡と伴わないa型遺跡とが近接して存在した可能性を想定しておく。同様の事例の可能性があるので表3ではb型遺跡とした向田A遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007b）である。調査区東側の微高地に石器の集中分布域がある。谷を挟んで約50m離れた地点で遺物を伴わない時期不明の住居跡がある。住居跡

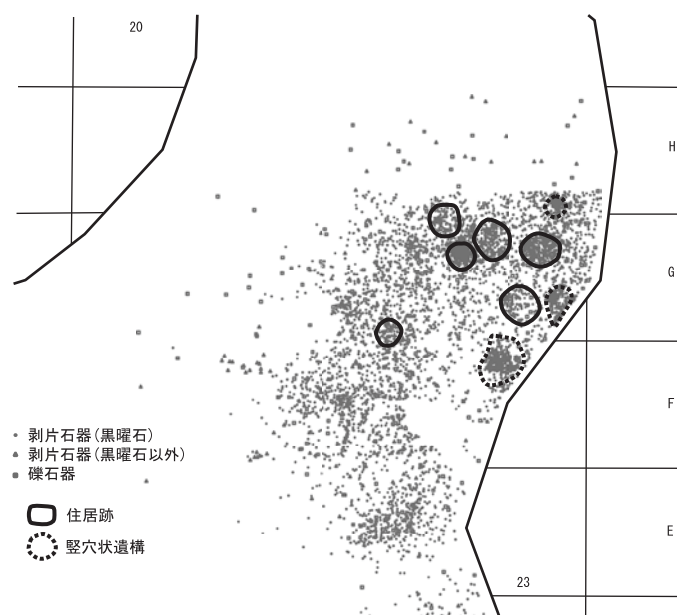
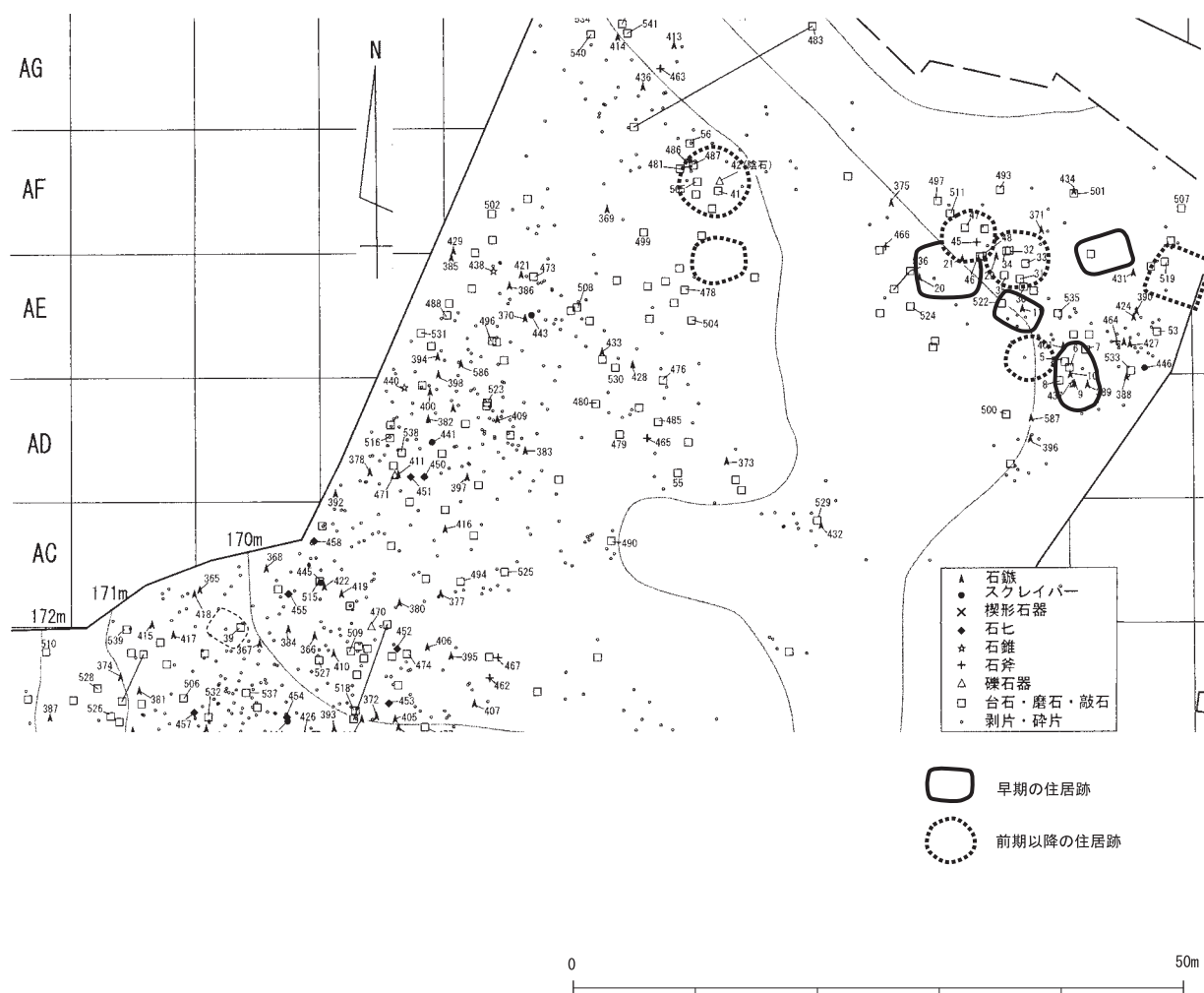


図8 梅ノ木沢遺跡(上)、佛ヶ尾遺跡(下)の住居跡と石器分布

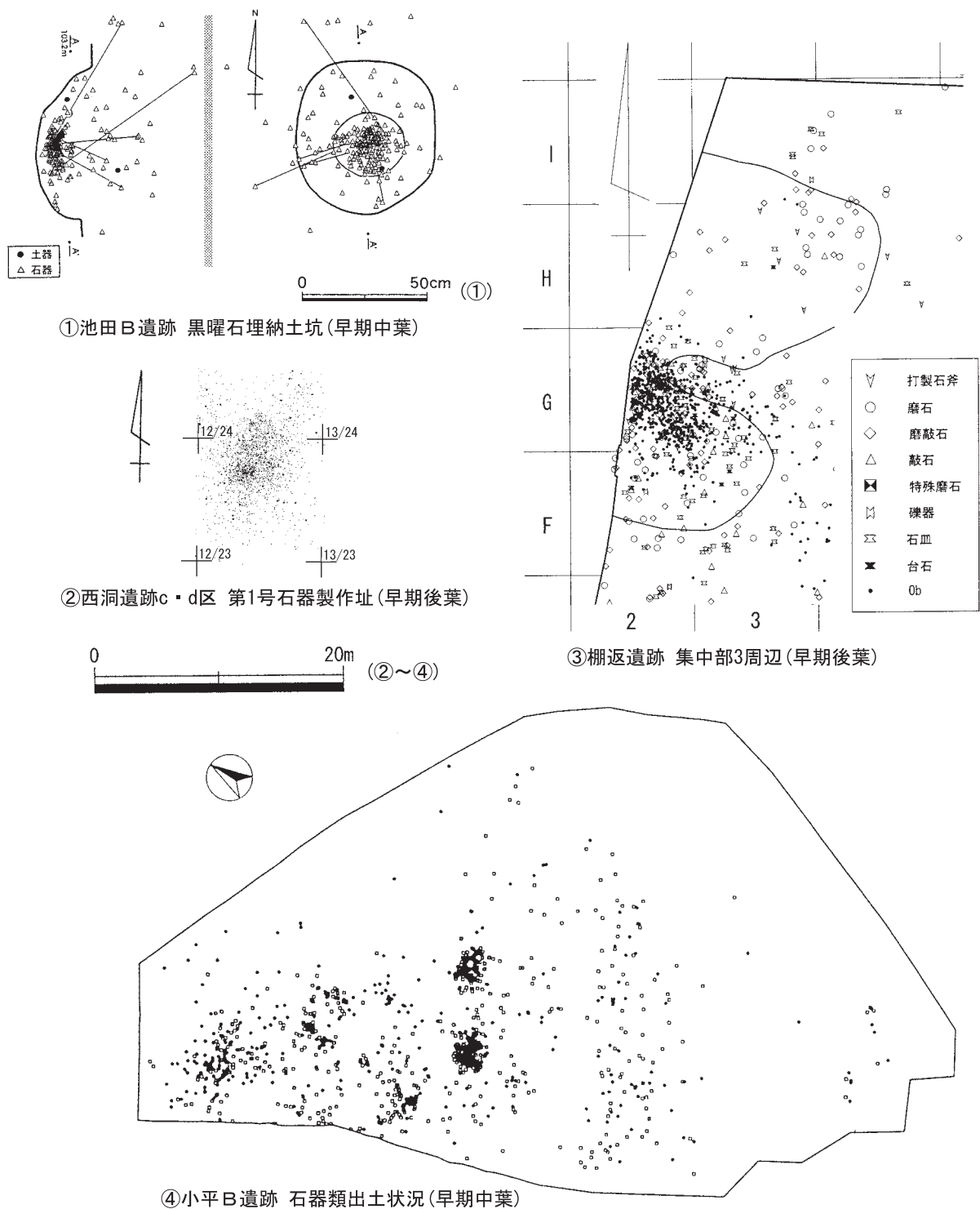


図9 早期中葉・後葉の遺跡の石器集中

がこの時期の遺構とすれば、近い時期に近接した地点で機能の異なる遺跡が形成された事例と考えられる。

(3) 早期後葉

a型遺跡としては梅ノ木沢遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008f）、尾上第2遺跡（沼津市教育委員

会2007）、清水柳北遺跡東尾根（沼津市教育委員会1989a）など、複数の住居跡から成る遺跡がある。このうち遺構外を含めて石器群の分布が示されているのは梅ノ木沢遺跡のみである。梅ノ木沢遺跡では他の時期の遺構・遺物が分布しているものの住居跡の分布域では石器の分布が希薄であ

り、調査区全体でも特に石器集中として捉えられるまとまりが見られないことが注意されている（図8上）。尾上第2遺跡、清水柳北遺跡東尾根では得られるデータが遺構内の資料数のみであるが、いずれも住居跡内からは剥片類まで含めて数点の石器が出土しているのみである。尾上第2遺跡は主に野島式・清水柳E類を伴う集落であり、重複住居が存在するなど継続的、或いは繰り返し遺跡が利用された形跡が伺える。清水柳北遺跡では早期に関しては中葉から末葉までに相当する住居跡がみついている。特に茅山下層式～茅山上層式期には同一地点で集落が継続しており、住居跡は茅山下層式新旧2期と茅山上層式期との、少なくとも3段階に分けられる。このように継続利用された遺跡でも住居跡に石器、剥片類がほとんど廃棄されていない状況は次項で述べる早期末葉の集落と対照的である。

b・c型遺跡では黒曜石の剥片・碎片等がスポット的に分布した石器集中が見られる例がしばしば見られる（「石器製作跡」、「石鏃製作跡」などとして報告されていることが多い）（図9②・③）。西洞遺跡c・d区（沼津市教育委員会2002a）のように定型石器から石核、剥片類までそろった組成となっている遺跡と、元山中C遺跡（三島市教育委員会1994）や中村C遺跡（三島市教育委員会1991）のようにわずかな製品とその製作に伴い生じたと考えられる剥片類のみから成る単純な組成の遺跡とが見られる。

こうした石器製作の場として注目されている遺跡が峠遺跡である。同遺跡は海への見晴らしのきく高所に位置しており、神津島産黒曜石が多く出土していることから、神津島から海上輸送で運ばれた黒曜石の一次搬入地点ではなかったかと考えられている遺跡で（東伊豆町教育委員会1995、池谷2009）、大量の黒曜石が搬入され、多数の石器が製作されている。この遺跡の中でもC区、及び3-10区と呼ばれる地点は早期中葉・押型文土器から後葉・条痕文土器までが主体となっており、早期中葉から後葉の石器製作場であったと考えられる。

(4) 早期末葉

打越式並行期の佛ヶ尾遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007a）、下ノ大窪遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）、塚松遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008e）、神之木台式期の乾草峠遺跡（三島市教育委員会2005）、塩屋式・下吉井式が出土し早期の最終末にあたる桜畑上遺跡（第二東名No. 1地点）（財

団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009a）がある。a型遺跡から出土した剥片石器の分布密度を比較すると（検討の余地のある若宮遺跡の事例を除けば）、早期前葉～後葉の遺跡と末葉の遺跡とでは歴然と差があることが分かる（図10、註7）。末葉のa型遺跡では住居跡に近接する地点に石器集中が残されていたり、住居覆土内に多数の石器や剥片類が廃棄されていたりする点で早期前葉～後葉の遺跡とは異なる（図8下）。但し、住居跡から例外なく多数の石器が出土している訳ではないことは一見して明らかである。住居跡が1基しか見つからない塚松遺跡、当該期の住居跡が相互に分散して分布していた清水柳北遺跡など、住居跡が単独で存在している遺跡では須らく住居内出土石器は少ない。一方、佛ヶ尾遺跡、下ノ大窪遺跡、乾草峠遺跡、桜畑上遺跡など複数の住居がまとまって分布する遺跡では、覆土内の遺物が多い住居と少ない住居が見られる。覆土内の遺物の多寡は地形とは特に相関していないため、単なる流れ込みではなく先に廃絶した住居を遺棄・廃棄場所として利用したものと考えられる。さらに住居跡の周辺に石器集中があり、複数の住居跡がまとまる佛ヶ尾遺跡、下ノ大窪遺跡、乾草峠遺跡、桜畑上遺跡では全体で剥片類の数量が数千点に上っている。清水柳北遺跡については遺構外の石器出土状況の情報が無いため不明だが、塚松遺跡では住居跡北側の石器集中が同時期のものと考えられる。

a型遺跡以外では老平遺跡で当該期の可能性がある小規模な石器集中の存在が報告されている（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008d）が、まとまった石器集中のあるb・c型遺跡が管見の限りでは見られない点が早期後葉

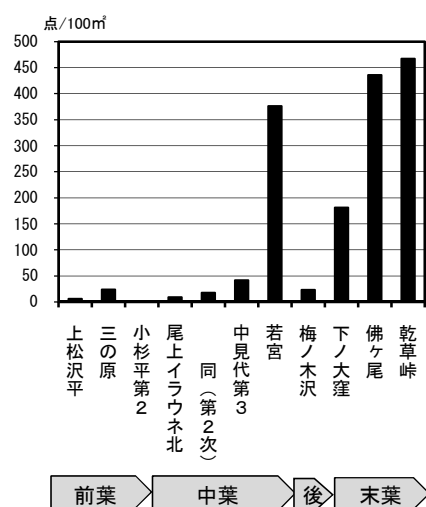


図10 a型遺跡の剥片石器分布密度

までと比べて対照的である。

6 遺跡群と居住パターン

前節で述べた時期別の石器群の在り方の変遷から、石器組成の変化と石器製作の場の変化とに注目すると、尖頭器や箆状石器など早期以降とは異なる石器組成で、a型遺跡での石器製作が顕著に見られる草創期後半、石鏃と磨石・敲石主体の石器組成に変化し、a型遺跡と石器製作の場とが分離する傾向のある早期前葉から後葉、石器製作の場がa型遺跡と一致するようになる早期末葉、というように分けることが可能であろう（註8）。

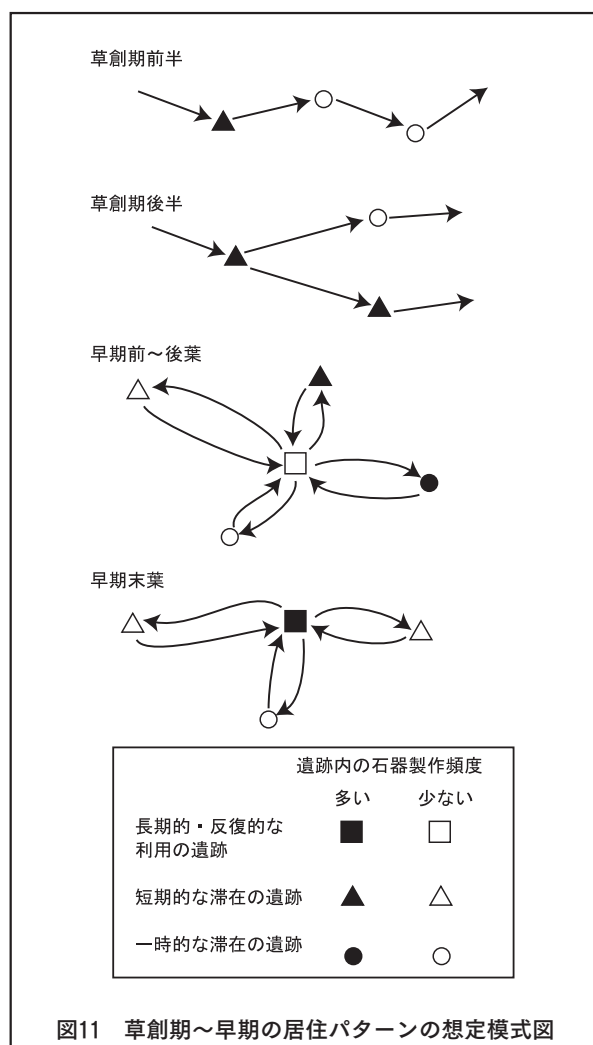
これに先立つ時期、すなわち隆線文系土器の時期について簡単に触れておく。この時期は有茎尖頭器に特徴づけられる時期であり、表採資料等も含めると多数の遺跡が知られている。一方で、それら尖頭器類の製作遺跡の存在は希薄であり、遺跡が密に分布する愛鷹山麓でも箱根山麓でも

現在のところそうした遺跡の存在は知られていない。現状で有茎尖頭器の製作遺跡として挙げられるのは伊豆市甲之背遺跡（中伊豆町教育委員会1996a）と芝川町小塚遺跡（芝川町教育委員会1995）とである。前者はガラス質黒色安山岩原産地直下に位置し主にこの石材により尖頭器製作が行われた遺跡で、隆線文土器、爪形文土器を伴う。後者は細隆線文土器を伴い、主にホルンフェルスで尖頭器製作が行われた遺跡であるが、このホルンフェルスは富士川水系に転礫が多く分布する石材である。いずれも石材の入手が容易な地点に立地していることが指摘できる。

以上の草創期から早期の遺跡において想定される居住パターンを模式的に示すと図11のようにまとめられるであろう。草創期前半には石器製作地点が原産地近傍など特定の場所に限られ、愛鷹山麓などでは一時的滞在地点しか残さない、遊動的な居住パターンを示す。草創期後半・押圧縄文土器段階になると、愛鷹山麓でも石器製作が行われている遺跡が現れる。先述の通り、住居床面付近から石器が集中して出土することがこの時期の特徴と言え、住居内で石器製作が行われたことが想定されている。民族誌事例では一般的に日常生活空間は清掃される傾向がある（西秋1994）ことからすると、こうした状況は住居廃絶時点の状態であって住居の利用期間中の恒常的な姿ではなかったと推測される。すなわち、住居を放棄し、他所へ移動するのに先立って石器製作を行ったものであろう（註9）。大鹿窪遺跡の事例は住居状遺構に切り合い関係が認められることなどから同一地点の反復的利用の可能性を示唆しているが、遺跡での滞在期間は後の時期に比して相対的に短かったと推測される。

早期に入ると一転してa型遺跡での石器製作の痕跡は前後の草創期後半、早期末葉と比較すると明らかに少なくなり、石器の平面分布が明示されている事例を見る限りでは、石器や剥片の集中部を伴う事例はb・c型遺跡に限られる。そうした状況は早期後葉の遺跡で顕著に見ることができるが、これは前葉から続くものであった可能性が高い。

すなわち、早期前葉から後葉の遺跡はおおまかに①a型遺跡、②b・c型遺跡（石器製作地点）、③b・c型遺跡（非石器製作地点）に分けることができる。①の遺跡では磨石・敲石が多い傾向にあり、②の遺跡では磨石・敲石類を伴いつつも石鏃をはじめとする剥片石器が多い傾向にあり、③の遺跡では出土石器自体が少ない。



こうした遺跡ごとの石器組成の差は遺跡で行われた活動の差を反映したものと考えられる。①のa型遺跡が拠点集落であるのに対し、②・③のb・c型遺跡が目的別の地点遺跡と考えられる。遺跡規模の変異、遺跡ごとの石器組成の変異がともに大きく、これは季節性コレクターのパターン（羽生2000a・b）に合致することから、a型遺跡とb・c型遺跡とは季節的な活動地点の差とも考えられる。具体的な事例としては、通年の拠点集落の周辺に目的別の活動地点を配するアイヌの居住パターン（渡辺1965；谷口1998：62頁）と類似することが考えられる。

このパターンが変化するのが早期末葉の打越式期以降で、石器製作の場は集落に伴って設けられる。早期末葉の遺跡は石器製作の痕跡が累積的に残されるa型遺跡と、石器の少ない小規模なb・c型遺跡とに二極分化した傾向にあると言える。前時期の居住パターンが季節的な遺跡の展開を示していたとすれば、早期末葉にはa型遺跡の通年の利用度が高まったと考えられよう。この時期は海進が最高潮に向かう一方で愛鷹南麓の低地や狩野川平野が海から切り離される時期に当たり、資源環境の変化があったことが考えられるが、居住パターンの変化との因果関係は明らかでない。但し、前・中葉の遺跡が丘陵だけでなく低地や沿岸部まで分布していたのに対してここで挙げている末葉の遺跡はより内陸にあり、主たる活動領域が内陸の丘陵部に移っていたことが想定される。

7 結語

最後に本研究の課題と問題点を述べて結びとしたい。

前節のまとめは恰も時期を追うごとに一貫して定住化が進展した、といった印象を与えかねない。しかし、前期初頭になると再び集落遺跡での石器製作の痕跡が消える一方で、早期の遺跡ではほとんど見られなかった石錘が多数出土するという変化の起こることが指摘されている（池谷2009）。定住化への単純な一方向的変化を示さないばかりでなく、僅か数百年程度（早期末葉は約500年程度の期間）で生業や居住パターンが変容していたことが分かる。

ところで、本稿では集成した遺跡のデータから導かれるパターンの抽出を試みたが、県東部における当該時期の発掘資料は少なくないに関わらず、データ数は未だ十分とは言えない状況である。これは（最近では状況は改善されつつあるが）剥片類を含む石器の数量や分布、或いは土器

群の分布との相関関係を検討できるような資料提示がなされないことが多いためである。本稿に見るように、遺構内の石器や主要器種のみ注目していたのでは遺跡の性格は十分に把握できない。総合的な資料提示の蓄積が望まれるところである。

註

- 1 山本典幸氏（1995）による遺跡形態の分類を参照した。
- 2 報告書では休場層20号石器ブロックがほぼ円形に遺物が分布し、遺構としては確認できなかったが住居跡の可能性が高いとされている。草創期2号ブロックは20号石器ブロックの周辺に分布するものである。
- 3 報告書で「礫斧」とされている刃部のみ加工した石器は礫器に含め、基部側まで加工されているものを打製石斧とした。
- 4 この種の石鏃を拡大したような石器は県東部の早期の遺跡で散見されるが、寺林遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2003）のように早期後葉の資料が出土していない遺跡でも出土しているため帰属時期の限定はできない。早期後葉に位置づけられるならば石製装飾品や異形局部磨製石器（トロトロ石器）が出土する時期でもあり、利器以外の道具の可能性も想定される。
- 5 報告書における「エリアB」の石器群である。
- 6 丸尾北遺跡では、早期前葉の土器群は主に調査区の東半部（報告書におけるエリアE～I）で出土しており、中期の五領ヶ台式、加曽利E3式、曾利V式などが重複して出土した。耕作の影響か、早期の土器とされるものにも暗褐色土出土のものがかなりあるが、少なくとも回転縄文土器（報告書におけるI-a群）、及び撚糸文土器（II-a群）は漸移層から富士黒土層にかけて出土している。石器群は、暗褐色土層、特に遺構に分布するものは中期後葉の加曽利E3式、曾利V式期のものと考えられるが、漸移層から出土している石器は早期前葉の土器に伴うものと考えられる。富士黒土層からはかなりの割合の石器が出土しているが早期の土器と中期の五領ヶ台式とが混在するため両時期のものが混在している可能性がある。表3では、早期前葉に位置づけられる可能性が高いと推定される漸移層出土分のみを集計して数量を示した。
- 7 上松沢平遺跡、若宮遺跡については調査区全体での集計、その他は住居跡分布域のみで集計している。
- 8 本来は存在した遺構が調査では検出不可能である場合もあったであろうが、傾向として早期末葉とそれ以前における対照的な在り方は大過ないと考えられる。中・後葉の遺跡で石器類が多い場合は悉く住居跡が見逃されたとは考えにくい。
- 9 西アジアで初めてテント以上の構築物を伴う住居跡が出現するナトゥーフیان期の住居でも、石器等を含む廃棄物が住居内から密集して出土することが知られている。この事例では、この時期は後のPPNA期、PPNB期と異なり住居内の廃棄物を片づける意識が未だ希薄であったとの解釈が示されている（Hardy-Smith and Edwards2004）。

引用・参考文献（論文等）

- 阿部芳郎 1989 「縄文時代早期における石器群の構成と生産活動—縄文文化の成立と展開を試考するための石器群の基礎的分析—」『駿台史学』第77号
- 阿部芳郎 1992 「縄文時代早期における植物質食糧加工用石器の在り方と生産活動—磨石、石皿多産遺跡の性格と生産活動の構成について—」『信濃』第44巻第9号
- 池谷信之 1997 「縦位密接施文から異方向帯状施文へ—駿豆地方押型文土器の変遷と立野式—」『利根川』24・25
- 池谷信之 2006 「環中部高地南東域における黒曜石流通と原産地開発」『黒曜石文化研究』第4号
- 池谷信之 2007 「石器製作と土器製作の転換点—東海地方を中心として—」『公開シンポジウム『縄文文化の成立—草創期から早期へ—』予稿集』
- 池谷信之 2009 『黒曜石考古学』新泉社
- 太田陽子・石橋克彦・松島義章・松田時彦・三好眞澄・鹿島 薫・松原彰子 1986 「掘削調査にもとづく伊豆半島南部における完新世相対的海水準変化」『第四紀研究』第25巻第3号
- 小栗一夫 1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相—南関東地方を中心に—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』II
- 小林謙一 2007 「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告 第137集』国立歴史民俗博物館
- 笹津海祥・瀬川裕市郎・関野哲夫・杉山治夫 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1
- 設楽博己 2002 「縄文時代遺跡の概観」『沼津市史 資料編 考古』
- 谷口康浩 1998 「縄文時代集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』第8輯
- 谷口康浩 2002 「縄文早期のはじまる頃」『異貌』第20号
- 西秋良宏 1994 「旧石器時代における遺棄・廃棄行動と民族誌モデル」『先史考古学論集』第3集
- 羽生淳子 2000a 「縄文人の定住度（上）」『古代文化』第52巻第2号
- 羽生淳子 2000b 「縄文人の定住度（下）」『古代文化』第52巻第4号
- 松原彰子 2006 「駿河湾奥の海岸平野—火山活動と沈降運動の影響を受けた平野」『日本の地形5 中部』東京大学出版会
- 宮崎朝雄 2005 「続・縄文早期燃糸文文化の竪穴住居について—関東地方における初期定住化—」『縄文時代』16
- 山本典幸 1995 「五領ヶ台式土器様式期の季節的居住性—石器組成の民族誌学的解釈—」『先史考古学論集』第4集
- 渡辺 仁 1965 「アイヌの生態と本邦先史学の諸問題」『人類学雑誌』第72巻第1号
- Hardy-Smith, T and Edwards, P. C. 2004 The Garbage Crisis in prehistory: artifact discard patterns at the Early Natufian site of Wadi Hammeh 27 and the origins of household refuse disposal strategies. *Journal of Anthropological Archaeology* 23

引用・参考文献（報告書）

- 熱海市教育委員会 1995 『大越遺跡』

- 大仁町教育委員会 1993 『長者ヶ原大平遺跡群発掘調査報告書』大仁町埋蔵文化財調査報告12
- 函南町教育委員会 2001 『上原遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『焼場遺跡B地点・五百司遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第73集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a 『上ノ池遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第99集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998b 『桧林A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第101集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『池田B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第122集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003 『寺林遺跡・虎杖原古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第142集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『上松沢平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第145集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『西山遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第170集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007a 『佛ヶ尾遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第175集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007b 『向田A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第178集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008a 『元野遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第189集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b 『下ノ大窪遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第190集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008c 『棚返遺跡・今里遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第191集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008d 『老平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第192集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008e 『裾野市富沢・桃園の遺跡群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008f 『梅ノ木沢遺跡I（縄文時代以降編）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第194集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009a 『桜畑上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第208集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b 『丸尾北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第210集
- 芝川町教育委員会 1995 『小塚遺跡』
- 芝川町教育委員会 2006 『大鹿窪遺跡・窪B遺跡（遺物編）』
- 裾野市教育委員会 1982 『裾野市千福市場平第1. 第2小杉平第1. 第2 細野沢遺跡 発掘調査報告書』
- 中伊豆町教育委員会 1996a 『甲之背遺跡』
- 中伊豆町教育委員会 1996b 『丸沢遺跡・六仙山遺跡』
- 沼津市教育委員会 1981 『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第26集
- 沼津市教育委員会 1988 『土手上・中見代第II・第III発掘調査報告書（足高尾上No1・6・7遺跡）』沼津市文化財調査報告書 第43集
- 沼津市教育委員会 1989a 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』

その1』沼津市文化財調査報告書 第47集
 沼津市教育委員会 1989b 『清水柳北遺跡発掘調査報告書
 その2』沼津市文化財調査報告書 第48集
 沼津市教育委員会 1990 『広合遺跡（b・c・d区）・広合
 南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第49集
 沼津市教育委員会 1991 『広合遺跡（e区）・ニツ洞遺跡
 （a区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第52集
 沼津市教育委員会 1992 『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告
 書Ⅱ』沼津市文化財調査報告書 第53集
 沼津市教育委員会 1997 『土手上遺跡（d・e区-1）発掘
 調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第63集
 沼津市教育委員会 2001 『葛原沢第Ⅳ遺跡（a・b区）発
 掘調査報告書1』沼津市文化財調査報告書 第77集
 沼津市教育委員会 2002a 『西洞遺跡（c・d区）発掘調査
 報告書』沼津市文化財調査報告書 第78集
 沼津市教育委員会 2002b 『尾上イラウネ北遺跡（第2次）
 発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第81集
 沼津市教育委員会 2007 『尾上第2遺跡発掘調査報告書』
 沼津市文化財調査報告書 第93集
 東伊豆町教育委員会 1995 『峠遺跡』
 富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』富士宮市文化財調
 査報告書 第6集
 富士宮市教育委員会 1986 『黒田向林遺跡』
 富士宮市教育委員会 1989 『小松原A遺跡』富士宮市文化
 財調査報告書 第12集
 三島市教育委員会 1991 『三島スプリングスC.Cゴルフ場

内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
 三島市教育委員会 1994 『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺
 跡Ⅰ』
 三島市教育委員会 1997 『小平C遺跡 小平B遺跡』
 三島市教育委員会 2005 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告
 書X』
 立教学院三の原遺跡調査団 1991 『三の原遺跡』

図版出典

図2：芝川町教育委員会2006、沼津市教育委員会2001、財
 団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009b
 図3：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2004、同1996、
 沼津市教育委員会1992
 図4：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008f、沼津市
 教育委員会2007、同1989a、同2002a
 図5：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007a、三島市
 教育委員会2005、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
 2009a
 図6：沼津市教育委員会2001より縮尺改編
 図7：立教学院三の原遺跡調査団1991より改編
 図8：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008fより改編、
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007aを元に作成
 図9：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000、沼津市
 教育委員会2002aより改編、財団法人静岡県埋蔵文化財調
 査研究所2008cより改編、三島市教育委員会1997

Lithic Industry of the Late Incipient / Initial Jomon Period in the Eastern Shizuoka

—The change in settlement pattern viewed from lithic industry—

Yuuki NAKAMURA

Summary: In the east part of Shizuoka prefecture, there were a few residential sites with pit-dwellings in the late Incipient stage of Jomon period, and widely appeared in Initial stage of that period. This study makes initial attempt to clarify settlement pattern of these stages by analyzing lithic distribution pattern of data from late Incipient / Initial Jomon sites. In late Incipient stage of Jomon period, stone tools and fragments were left mainly inside of dwelling. In the next stages, very small amount of lithic débitage were found inside of dwelling. On the other hand, we can find quite few examples of manufacturing tools at resident places, but certain numbers of fragments of stone tools were left away from residences. At the end of the Initial stage, Okkoshi pottery stage, great amount of stone tools and their by-products were found discarded inside and around dwellings. Such difference in the lithic distribution pattern tells the change of places of manufacturing stone tools. At the same time, they are deeply connected with the change of settlement pattern which is controlled by their hunting schedule and seasonality.

Keyword: Incipient Jomon period, Initial Jomon period, lithic distribution pattern, settlement pattern